

粗飼料供給センターによる草づくり

新見市法曹 熊野粗飼料供給センター

事例の内容

1 地域への粗飼料供給を目指し、和牛農家が自給飼料の共同生産に取り組む

新見市井倉の法曹熊野地区では、和牛農家による自給飼料共同生産組織「熊野粗飼料供給センター」(以下供給センター)が飼料生産の共同作業を行っています。

供給センターは、昭和60年結成の「熊野草地利用組合」を母体に、平成9年に再結成されたもので、地域への粗飼料供給を目指して「供給センター」という名前をつけました。

現在、組合員は3名(他にオペレーター予備員数名)です。地域内の休耕地などを借入れ、栽培面積の拡大を図る一方、高齢者からの作業受託も行っており、高齢化が進む中で、荒廃地の防止にも一役かっています。

2 良質自給飼料を低コストで生産している

(1) 自給飼料生産量の向上

借入地・受託面積の増加により、自給飼料栽培面積は年々拡大しています(表1)。各作物の栽培面積、収量等は表2のとおりで、特にイタリアンにスーダングラスを組み合わせた栽培体系(図1)で、収量アップを図っています。なお、イタリアンの3番草は掃除刈り程度で、収量はほとんどありません(図2)。

表1 自給飼料栽培面積の推移 (単位:ha)

区分	平成9年	平成10年	平成11年
所有地	1.5	1.5	1.5
借入地	4.5	6.0	6.0
作業受託	2.0	1.8	2.9
合計	8.0	9.3	10.4

表2 各飼料作物の栽培面積と単収

飼料作物名	作付面積	刈取回数	合計単収
イタリアン、オーチャード主体混播牧草	2.5ha	3回	7,000kg/10a
イタリアン+スーダングラス	2.0	3	9,000
イタリアン	3.0	2	6,000
(受託)イタリアン	2.9	2	6,000

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
内容						×						
						刈取						播種
									×		×	
									播種	1番	2番	

図1 イタリアン+スーダンの栽培体系(イタリアン、スーダン)

月	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
内容						×			×	×		
						追肥						
							1番		2番		3番	播種

図2 イタリアンライグラス(3回刈り)及び混播牧草(3回刈り)の栽培体系

(2) サイレージ品質の向上

乾草づくりは天候に左右されやすいため、より安定した品質の自給飼料生産を目的として、ロールベールサイレージ体系を導入しました(写真1)。さらに、刈り取り時期や水分調整方法、ラップの巻き回数などを改善することで、品質が年々向上し、岡山県自給飼料調製技術共励会にも上位入賞するようになりました。

また、鳥害対策のために、ロールベールサイレージを中古のフレコンバックに入れて保管する方法をとっています。これは効果が高く、さらに取っ手がついているので持ち運びも便利になりました(写真2)。



写真1 ロールベール作業



写真2 ロールサイレージの鳥害対策

(3) 生産コスト低減への取り組み

資材の共同購入で、経費の節減を図っています。

機械の共同保有と長期利用によって、減価償却費を低減させています(表3)。また、修繕費を低減するため、なるべく自分たちで修理、整備するようにしています。

表3 保有機械の概要(他に組合員所有のトラクターを利用)

機 械 名	規格等	導入年	耐用年数	対象事業名
トラクター	41Ps	昭和60年	8年	昭和60年度 岡山中部区域 畜産基地建設事業
テッダーレーキ	幅280cm	同上	5年	
ヘイベラー	梱包・直方状	同上	5年	
ディスクモアー	幅161cm	平成10年1月	5年	平成9年度 肉用牛生産条件 特別整備事業
ロールベラー	100cm	同上	5年	
ラッピングマシーン	直径90×80cm	同上	5年	

3 省力的な粗飼料確保システムが確立したことで、規模拡大を志向するようになった

組合員から、「良質粗飼料を確保できるようになったので、乾草をほとんど購入する必要がなくなった」「ロールベール体系のため、作業が非常に楽になった」「規模拡大を考えるようになった」という声が聞かれるようになりました。

4 粗飼料供給センターの経営収支はトントン

供給センターの収入は受託料のみで、受託単価を10,000円/10aとしており、この中にはラップフィルム代やトウィン代等の実費が含まれています。また、共同作業に係わる種子代、肥料代、人件費等の経費については、構成員が生産した粗飼料を購入すると考えて、各自で負担しています。

以上のような努力により、条件には恵まれない中山間地域における取り組みにもかかわらず、損失を生じない経営を続けています。

技術解説

1 栽培体系について

現在の中心的な栽培体系(イタリアンライグラス+スーダングラス)は、ロールベールサイレージの機械体系に良く適合している。

しかし、嗜好性に問題があり、現在、新たな栽培体系を検討するため、栄養価や嗜好性を考慮した草種を選択するための試作を行っている。また、面積拡大に向けて、播種作業を省力化するために一部永年牧草に切り換えることも検討している。

2 今後の発展方向について

供給センターでは、草づくりを通して、地域の和牛農家や耕種農家とともに牛飼いを楽に長く続けていくことを目標としている。生産された自給飼料は、まだ構成員内の自給用にまわっている状況で、受託以外には地区内に供給するまでにはいたっていないが、地域との連携を強めながら供給センターの体制を充実し、単収の増収や飼料畑の集積、面積拡大などにより目標達成を目指しているところである(図3)。

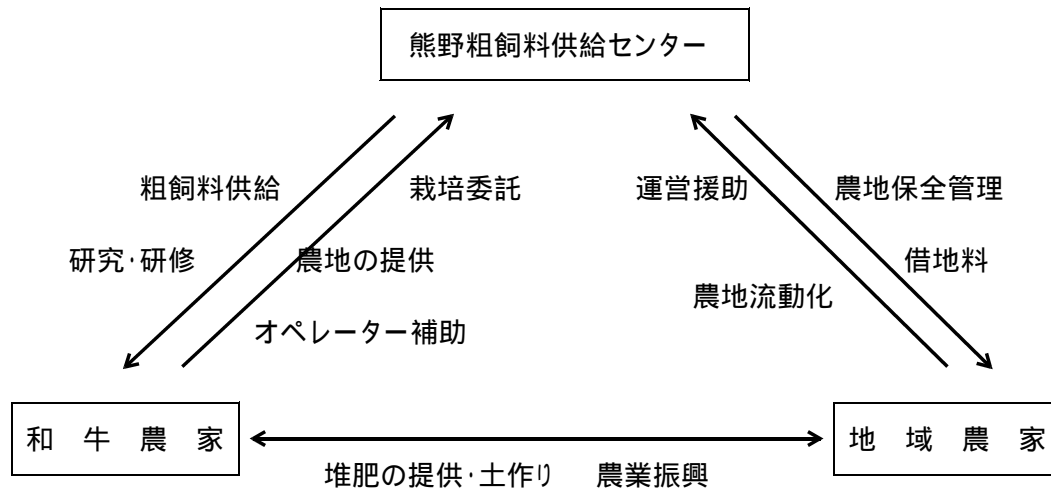


図3 供給センターと地域の展開図

参考にする場合の留意点

1 共同で行うための組織づくりが重要

協力体制ができれば、自給飼料生産以外でもいろいろなことに取り組むことができる。本事例では、休耕地の放牧にも共同で取り組んでいる。

2 農地の集積を図るため地域の協力、耕種農家等との連携が必要

本事例が借入地を増加できている要因として、地域の農家との信頼関係が大きい。図3のような地域との連携を考慮することが重要である。

3 オペレーターの確保・育成

ロールベールサイレージ体系で効率的に作業を実施しようとするれば、ロール、ラッピング、運搬で最低3名は必要となるので、オペレーターの確保・育成が重要である。

4 機械の管理と更新

機械の整備や簡単な修理を、できるだけ自分たちで行うことで、機械を長持ちさせ機械代や修繕費を節約できる。

しかし、動力となるトラクターについては、年数が経過すると、能力低下や故障発生が多くなるため、現有機械の更新も含めて考えておく必要がある。



阿新農業改良普及センター 三宅 清